

令和3年9月1日

未来への扉23

校長 平野 雅仁

いよいよ2学期が始まりました。

緊急事態宣言が延期・拡大され、普段通りの生活になかなか戻らず、この後の教育活動にも影響が出てしまうことは、致し方ないこととは言え、非常に残念で心苦しく感じています。

このような中であっても、感染症対策を十分に講じて、夏季休業期間中、三者面談や部活動、補習教室に参加しているみなさんの頑張っている姿がありました。

今日、みなさんが元気にそろって登校できたことは当たり前のことですが、とてもうれしく思っています。

さて、第32回夏季オリンピック東京大会は、新型コロナウイルスの影響で史上初めて1年延期となりました。大会は、緊急事態宣言下での開催を強いられ、大半の会場は無観客。批判と混乱の中、会期中も否定的な声は消えませんでした。その一方でアスリートたちは困難な状況下でも力を尽くし、熱戦を繰り広げました。

アスリートや解説者の声の中で、印象に残ったものをいくつか挙げてみます。

「賛否両論があることは理解しています。ですが、我々アスリートの姿を見て、何か心が動く瞬間があれば本当に光栄に思います」と、柔道男子73キロ級の金メダリスト 大野将平選手の声が印象に残りました。苦悩や葛藤を抱え、前代未聞の厳しいルールや検査をしながら臨んでいた全アスリートの想いを代弁したものだと思います。

メダルを逃したアスリートの声には、体操の内村航平選手「これだけやってきても失敗することがある。(体操は)面白さしかない。」バドミントン男子個人 桃田賢斗選手「いろんなこと、つらいことがあったが、いろんな人のおかげでコートに戻り、憧れの舞台で試合をすることができた。」また、実況・解説では、スケートボードの解説者 瀬尻 稜氏が、手すりや階段などトライするのも怖い障害物でガンガン攻めていることを「ゴン攻め」という言葉で解説していました。そして、最も印象に残ったのは、13歳という最年少で金メダルに輝いたスケートボード女子 西矢椋選手に倉田大誠アナウンサーが、「決まったあ！13歳 真夏の大冒険！」というコメントしていました。西矢さんの笑顔も素晴らしかったです。

アスリートの多くが「開催していただいたことに感謝」「支えてくださったすべての方への感謝」の言葉を異口同音に述べていました。「ありがとう」という感謝の言葉、「お互いを称え合い、応援する姿」が様々な場面で見られました。

みなさんの中にも様々な思いや印象に残る競技、アスリートたちがいたと思います。

続いて、パラリンピック大会が24日から開催されています。パラリンピックについては、9月の学校だよりにも書きましたので、時間のある時に読んでみてください。

みなさんが、5年前からオリンピック・パラリンピック教育に取り組んできたことなどを思い出しながら、この後もパラアスリートの活躍と声を楽しみに応援しましょう。

それでは、2学期がみなさんにとって有意義で充実した日々になるように先生方、主事さん方も応援しています。頑張っていきましょう。

始業式のあいさつより